

会長講演

D・B・シモンズ知見補遺

荒井保男

演者は第九十五回日本医史学会総会に於て『米医D・B・シモンズについて』と題して特別講演の機会を与えられて、すでに報告したが、その後新知見を加えることができ、少しくシモンズの全体像をさらに解明し得たと思われるので、ここに報告する次第である。

その一

シモンズは安政六年（一八五九）十一月一日に来日したのであるが、翌年の春には早速医師として診療を始めたようである。文久元年頃の発行と考えられる橋本玉蘭齊の『御開港横浜大絵図二篇外国住宅図』によると、居留地アメリカ一番地に、のちにウォルシュ・ホール商会のパートナーとなったホールと一緒に住んでいたことが知られる。またヘボンの書簡からも、万延元年五月頃には診療所を開いていたことが知られる。またヘボンの書簡からも、万延元年五月頃には診療所を開いていたことが知られる。

ホールとは来日の船中で知り合ったようである。

その二

明治五年（一八七二）早春、シモンズは神奈川県陸奥宗光宛に『防恙法』を建議した。これは我が国に於ける公衆衛生の嚆矢とされる。この建議は権令大江卓によって採用され、明治六年「家作建方条目」として結実し、都市衛生の原点となり、横浜近代衛生都市建設に大きな役割を果たした。

その三

明治初期、「脚気」は国民病といわれ、医学者の大きな研究対象の一つであった。シモンズは当時に於ける脚気研究の第一人者であった。

解剖学に明るいシモンズは明治六年六月に脚気患者の病理解剖を行っている。同年七月二日の横浜毎日新聞がその模様を報告している。

従来、わが国に於ける最初の病理解剖は、ホフマンとデーニッツ教授が、明治六年十一月十二日 四谷竈筒町の脚気患者近藤徳次郎の屍体解剖とされるが、シモンズはこれより早く病理解剖を行っているのであって、注目すべきことであらう。

シモンズは一八八〇年（明治十三年）『Medical Report of Imperial Maritime Custom of China (第十九号) 誌上に、Beriberi, or the "Kakke"』と題して、今までの研究結果を一篇にまとめて報告した。

二十八頁に及ぶ論文で、脚気の定義にはじまり、歴史的側面、地理的分布、その成因を述べ、病例を呈示しながら症状を分析し、その診断と予後を論じ、病理解剖所見及び治療に言及している。シモンズは脚気の成因を湿地から発生する毒性物 (special miasma of ground exhalation) と考えていたようで、その見地から治療については、乾燥した土地や山への転地をすすめている。

十全医院が高燥の野毛山上に建設されたのは、このシモンズのミアスマ説によるものと考えられる。転地のほか内科

的治療としては栄養と食事の重要性を強調し、米飯の悪いこと、アズキなどの豆類や麦を米飯に混ぜて摂ることが有効であると述べている。

このシモンズの論文の抄録が一八八七年、ドイツの『細菌学・寄生虫学中央雑誌』第二巻一四号に掲載された。これを当時ドイツ留学中、ベルリンに在って読んだのが、若き森林太郎（鷗外）であった。文中、日本文化の現在及び昨日までの状態について、全く事実と反する見解があると見てとり、林太郎は早速、戦闘的とも思われる反駁論を執筆、*“Beriberi, und cholera in Japan”*と題してドイツ医事週報五十二号に掲載した。

この中でシモンズの米食説を不完全な帰納法による誤った結論と評して、麦飯による治療法などを非としたのである。

森林太郎は帰朝後も脚気問題の責任者として関与し続けてきたが、一貫して米飯説に反対し続け、その結果日清戦争で四万一千余の脚気患者と四千余の同病死者を出しただけでなく、次の日露戦争でも二十五万余の患者と二万八千にのぼる同病死者を出したのである。

鷗外も犯したこの誤謬の事実は、後のわれわれに多くの教訓を与えている。

その四

シモンズは来日早々宣教師を辞し、医の道を選び、それに対するS・R・ブラウンの非難めいた当時の書簡を読むと、二人の仲はなんとなく「良いものではない」と考え勝ちであるが決してそうではないようである。

明治十二年六月のJ・M・フェリス宛のブラウンの書簡によると、ブラウンは膀胱炎と膀胱結石でシモンズの診療を受けている。この病気の故にブラウンは故国アメリカに帰ることになるのであるが、シモンズとの交遊のあったことは明らかである。

ヘボンとシモンズの交遊は極めて親密で、ヘボンはシモンズの医学界に於ける業績と、その人柄と高く評価していることは、ペリー宛による手紙からも明らかであると高安伸子女史は報告しておられる。

その五

シモンズの死亡年齢については福沢諭吉の五十七歳説と小沢三郎の五十四歳がある。

演者は神奈川県史料第五卷三七五頁に

明治六年十月十八日

外国人雇入願

一 医学教師

米国人セメンス

当時四十二歳一ヶ月

給料一ヶ月三百二十円

とあるのを見出し、これに基いて計算すると、その死亡年齢が五十七歳となる。それ故、演者は現在シモンズ享年五十七歳説を信じている。

(飯山医院)